

26期生の皆様ー7

1964年の東京オリンピックは10月10日に開会式が開かれ、その後この日が体育の日となりました。10月10日はオリンピックの開会には遅い時期らしいが、日本では秋晴れが続く頃だからこうしたそうです。台風には驚きましたが、その後好天が続いています。市内は修学旅行生であふれています。

さて、今回からしばらくキリスト教の始まりについて説明したいと思います。高校の現代社会の教科書に「世界三大宗教」という項目があります。三大宗教とは「仏教、キリスト教、イスラム教」のことで、それぞれの創始者としてゴータマ・シッダルタ、イエス・キリスト、ムハンマドとなっています。ゴータマは紀元前6世紀の人で、イエスは紀元1世紀の人だから、キリスト教は仏教より後に生まれたように見えます。確かにイエスはゴータマよりも後世の人なのですが、キリスト教は1世紀に突然現れたのではなく長い準備期間があった。すなわちユダヤ民族の歴史です。

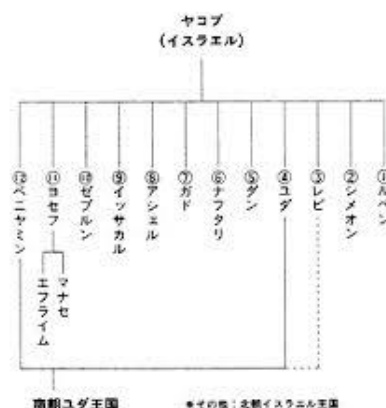
ユダヤ人と言っても日本では余りなじみがないでしょう。でも、欧米や中東では非常に重要な人たちです。ユダヤ人は、紀元前19世紀頃、今のイラク（メソポタミア）からパレスチナに移住したアブラハムという人の子孫です。彼の住んでいたウルという町はメソポタミア文明の栄えた町の一つで、多神教の宗教が支配していました。アブラハム（最初はアブラムと呼ばれていた）も多神教を信じていたと思われます。聖書によれば、アダムとエバ以降、何万年何千年も長い間、人類に対して沈黙してきた神が、アブラハムに突然話しかけます。そして、今住んでいる場所を出て、示される場所に移住することを命じました（創世記、12章）。また「私はおまえの子孫を空の星のように、海の砂のようにふやそう。・・・おまえの子孫によってすべての地の民は祝福されるだろう」（創世記、22章、17-18）という約束をします。



こうしてユダヤ教が生まれるわけですが、まだ宗教としては原始的なものでした。ただ、とても特異な点がありました。それは唯一の神を信じることと、上の文の「おまえの子孫」という、誰かわからないが、世界中に影響を与えるような子孫が出るという、とても不思議な約束があったことです。世界史の教科書に「ヘブライ人は・・・救世主（メシア）の出現を待望する信仰が生まれた」とありますが、その信仰が生まれたのは、この約束が後の時代にもさらに繰り返されていったからです。このメシアを送るという約束が、旧約聖書に特徴的な預言の中心です。

この子孫とはどんな方か、後の預言で少しずつ明らかにされてきます。まずアブラハムの孫ヤコボが臨終の床でした予言によれば、それは息子のユダの子孫から生まれる。さらに、後にユダ族のダビデの子孫から生まれるというふうに。

ヤコボの予言は原文ではこうです。「ユダから杖は奪われず、彼の足の間から指揮の杖はとられることがない。杖のものと持ち主であるお方が来られるときまで、民はみな、そのお方に服従する」（創世記、49章10）。「杖」は王様の権力の象



徴で、ユダ族から王が出るという予言だと解釈されました。

ダビデ王は紀元前10世紀ユダヤ王国を治めた王ですが、神からこう告げられます。「私はおまえの子孫に跡を継がせ国のもとを固めさせよう。その子孫は私の名のために家を建て、私は彼の王座を永久に堅いものにしよう」(サムエル下、7章12~13)と。このためメシアはダビデの子孫から出ると信じられるようになり、イエスの時代に「ダビデの子」と言えばメシアを指していました。そこで、メシアはダビデのような栄光の王であると考えられました。

しかし、ユダヤ王国はダビデとソロモンの黄金時代の後、南北に分裂し、北の王国は紀元前8世紀の末に滅ぼされ、南のユダ王国も紀元前586年にバビロニア王国によって滅亡させられます。この分裂と滅亡の苦しい時代に最もたくさんの預言者が出ました。その中でも最も多くのメシアについての予言をしているのがイザヤです。例えば「闇を歩む民は大いなる光を見た。闇に包まれた地に住む者に日から輝いた。・・・私達のために一人のみどり子が生まれ、・・・その名は・・・永遠の父、平和の君となえられる。彼の治めるところは広大、かぎりない平和のうちに、ダビデの座を、その国を、法と正義とをもって、今もいつまでも固め強められる」(9章1~6)。ここでもメシアは王だと言われています。ただ、力によってではなく正義によって治め、平和をもたらす方ですが(11章も参照)。

メシアは力強い王であるという点が強調される予言もあります。例えば「主は私(注、メシアを指す)に言われた。『おまえは私の子である。私は今日おまえを生んだ。私に求めよ。そうすれば私は異邦の民を遺産として与え、地の果てまでも領土として与えよう。鉄の杖で彼らを打ち破り、陶工のつぼのように彼らを打ち砕け』」(詩編、2篇)。こういう力強く敵を打ち破るメシア像は、ユダヤ人が外国から圧迫されたり支配を受けたりするにつれて好みのメシア像になっていき、ローマ帝国の支配下にあったイエスの時代、ユダヤ人の多くはこういうメシアを待望していました。

福音書にはその期待が随所に現れます。イエスが公の宣教をする直前に、洗礼者ヨハネが「悔い改めよ」と叫んで、ヨルダン川で人々に洗礼を授け始めたとき、ユダヤ人は「この人こそメシアではないか」と思いました。さらに、無学の女性でさえ、「私はメシア『油注がれた者』と呼ばれる方がおいでになることを知っています。その方がおいでになるとき、一切のことを知らせて下さるでしょう」と信じていました(ヨハネ、4章25)。

イエスはその到来が前もって知らされ待ち望まれていた方です。その予言はユダヤ人によってユダヤ人になされました。そのため、ユダヤ人の歴史はキリスト教にとってもとても大切で、救いの歴史と呼ばれます。キリスト教の始まりは、ユダヤ人の太祖アブラハムに神が現れ約束をしたときに生まれた時だと言えます。その約束はさらにアダムとエバにまで到着します。彼らが罪を犯して樂園を追われるとき、彼らをだましたへびに対して神はこう言われます。「おまえと女の間、おまえのすえと女のすえとの間に、敵意を置く。女のすえはおまえの頭を踏みくだき・・・」(創世記、3章15)と。このへび(悪魔)の頭を踏みくだくと予言された「女のすえ」こそ、アブラハムに予言された「子孫」であるとユダヤ人は考えたのです。

でもこの子孫は単に王様であると言われたものではありません。他にも色々な面を持つことが予言によって徐々に明らかになります。今回はそのことについてお話しします。